
品濃・川上の代官、新見家

天正9年(1581年)この品濃に徳川家康の家来であった新見正勝(当時25才)という武将が品濃の齊藤さん(屋号 おやしき)という家に居候として住み始めた。

しかし何故この品濃に住み始めたかについては不明である。ただ「故あって」と伝えられているだけである。

当時この品濃辺りを治めていた人物は肥田山城守という小田原北条氏の家臣であった。豊臣秀吉が小田原北条氏を滅ぼし、その戦功(?)として徳川家康は関東に転封され慶長8年(1603年)に江戸幕府を開府した。

したがって新見正勝が住み始めた天正9年は江戸開府より約20年も前のことである。当然小田原北条氏の領地内であった。小田原北条氏・徳川家康いずれも戦国大名であるから他国の領地内に配下を置くということはありえない話である。

ただし、小田原北条氏五代目の北条氏直は徳川家康の娘と結婚していたので両家の関係はかなり微妙であったともいえる。

ここから先は想像の話であるが織田信長が横死し豊臣秀吉が天下をとるも、その先は俺だと徳川家康は虎視眈々と天下を狙っていたことは事後的に周知のとおりである。

だとすれば「鳴くまで待とう」といわれる忍耐強い家康のこと、天下盗り、その後の幕政という壮大な構想は当然描いていたとしても不思議ではない。

そういう構想の中には人の配置ということもかなり重要なシナリオとしてあったことも想像に難くない。

新見正勝という人物も、ことによると、そんな構想の中にあつた一人だった可能性もあり得る話ではなからうか。

歴史は「故あって」としか伝えてないが新見正勝がこの地に居候した背景には徳川家康の先見性からして因果を含められたスパイないし先遣人の匂いもしてくる。飛躍的すぎる想像であろうか。

新見正勝と品濃、これはピンポイントの話であるが緻密綿密な徳川家康のこと、この類の例は全国的に散らばっているとみて間違いもないかもしれない。

さて新見正勝のその後であるが小田原合戦に勝利した戦功として肥田

山城守の領地であった品濃・川上250石を徳川家康から拝領し幕臣として九代新見正興の時代（幕末）まで品濃・川上の代官としてこの地を知行してきたという由緒ある家である。その末裔は現在品濃には住んでいないが品濃谷宿公園の一角にある先祖代々の墓ないし供養塔に時折墓参りに来ているそうである。

また品濃北天院には新見家代々の位牌がある。

新見家の代々はかなり聡明な人物を輩出しているが特筆すべきは九代正興である。

正興は相模の名門三浦氏から新見家へ養子に迎えられた人なので新見家直系ではないがかなり優秀な人物であったと伝えられている、

最終的には外国奉行までのほり詰め万延元年（1860年）日本国全権大使としてワシントンに赴き日本開国の調印式を済ませるという大仕事をした人物である。

正興一行は米国軍艦ポーハタン号に便乗してハワイ・サンフランシスコ・パナマを經由しワシントンに着き調印式を済ませる。次に米艦ナイヤガラに乗り大西洋を經由しアフリカ最南端喜望峰を回りジャカルタ・香港を経て帰国している。

したがって、正興は世界一周をした最初の日本人ともいわれている。

この時サンフランシスコまで付き添ったのが勝海舟が引率した「咸臨丸」であるが「咸臨丸」はサンフランシスコで引き返しハワイ経由で帰国している。

正興は幕臣だったので生涯の殆んどを江戸勤めで送ったが、その根っこがこの品濃にあったわけで品濃の村人にとっても、わたしミスターKにとっても鼻の高い話である。

（品濃歴史研究会資料より要旨抜粋）